

パトリック・ヴィバー6歳からチューバを始める。ほどなくして歌唱能力を評価され、10歳よりトニ・ラモンの指揮するラジオフランスの合唱団に入る。2005年から2008年までパリ地方音楽院で学んだのち、パリ国立高等音楽院のサクソルンバス科でフィリップ・フリツチュ氏に、カルテット「Opus333」(オーピュス333)

の一員として室内楽科でクレール・デゼールとアミ・フラマーの各氏に師事。

2015年に満場一致の最優秀賞を審査員の賞賛付きで首席卒業、また「楽器の多様性とプログラムの選択」において特別賞を受賞。モダン楽器の修了過程と並行して、ミシエル・ゴダールと共に古楽器セルパンを発掘・探求し、ジャン・チュベリーとセルジュ・デルマスのもとで古楽を本格的に学ぶ。間もなくこの楽器のスペシャリストの一人となり、多くの古楽・バロックアンサンブルに招待される。また、オフィクレイドと歴史的チューバに対する演奏アプローチの研究を続け、その活動は2011年と2013年にメイヤー財団によってサポートされている。2016年にはソリストとしての初CD

「The Virtuoso Ophicleide」をリリースし、リチエルカール・レーベルから「Choc de Classica」賞、カルテット「Opus333」の初CDにはクラルト・レコーズからは「Matriochka」賞を贈られる。過去の楽器と今日の音楽との架け橋を常に模索し、作曲家オレリアン・デュモン、ジェラルド・ペツソン、バンジャマン・アタイ、即興音楽グループ Spat'sonoreらと共にセルパンのための作品を数多く生み出している。2018年、バンジャマン・アタイ作曲による初の「セルパンとオーケストラのためのコンチェルト」をアムステルダムコンサートヘボウにてソリストとしてリール国立管弦楽団、またリスボン・グルベンキアン管弦楽団と共演する。このコンチェルトは、フランスでのクラシック音楽大賞「Victoires

de la Musique Classique」 2019年度作曲コンテンポラリー部門にノミネートされ、同年にリール国立管弦楽団とアルファ・レーベルで録音された。今日、パトリック・ヴィバーは様々なバロックアンサンブル (Ensemble Correspondance, Freiburger Barockorchester, Concert Spirituel)、またモダンオーケストラ (Dresdner Festspielorchester, Camerata Lipsiensis, Chambre Philharmonique, Insula) との共演、そして自身のカルテット「Opus333」での現代音楽作品や室内楽での活動も続けている。2007年よりヴェルサイユ音楽院でセルパンを教えるほか、数多くのマスタークラスを行う。(Conservatorio Santa Cecilia Roma, Escola Superior de Música de Lisboa, Aetyb Barcelonna, Valencia) また、数多くのリサイタルやソロコンサートを通してプロ演奏家としての活躍の場をフランス、また世界各国に広げている。